

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	MANDAKH OYUNCHIMEG
論文題目	英語及びモンゴル語の時制、アスペクトに関する対照研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、英語およびモンゴル語におけるテンス・アスペクトの表現形式を、英語の単純過去形、単純現在形、進行形という3つのカテゴリーとそのモンゴル語の対応に関して比較・対照した実証的研究である。</p> <p>1章では、研究の目的、範囲、意義、扱われるデータと方法論に触れ、モンゴル語の概説が述べられている。</p> <p>第2章ではテンスおよびアスペクトに関する理論的な枠組みが扱われているが、その中でも特に本論に関わるBybee (1985) におけるテンス・アスペクト表現の3つの主要な結合手段としての、Ⅰ. 語彙的表現、Ⅱ. 屈折的表現、Ⅲ. 統語的表現、Bybee (1994) による証拠性 (evidentiality) の概念に基づく過去時制における発話時からの遠隔度合の区別を表す“即時対遠隔” (immediate versus remote)、Comrie (1985) により指摘されている現在、過去、未来という基本的な3つのテンスの区別と、現在/未来、過去/非過去、未来/非未来という時制の2区分の紹介、Vendler (1967) により導入された、状態 (State)、活動 (Activity)、達成 (Accomplishment)、到達 (Achievement) という動詞の4タイプとVendler以後の動詞タイプの分類、Comrie (1976) におけるアスペクト対立の分類とその後の理論的展開が詳述されている。</p> <p>第3章ではモンゴル語のテンスおよびアスペクトに関する先行研究の概説がなされている。モンゴル語のテンスに関しては本論文が扱っている非過去時制接尾辞-na、過去時制接尾辞 -v、-laa、-jee についての先行研究が挙げられており、特に過去時制接尾辞-v、-laa、-jee の3つの接尾辞の意味的区別、アスペクトに関しては本論文の主題の1つである -j bai- によるモンゴル語進行形の従来の説が紹介されている。</p> <p>本論文は英語迂言形式も時制と認め、過去、現在、未来の三時制の区別があるとする Sweet (1891) を始めとするDeclerck (1991) などの第1グループ、屈折形式による過去、現在、の二時制の区別のみを認めるKruisinga (1932)、Quirk (1985) などの第2グループの学説の違いを説明している。また、Declerck (1991) による過去時領域 (past time-sphere) と現在時領域 (present time-sphere) の区別を紹介し、この支配領域 (temporal domain) に基づいて、モンゴル語と異なり英語においては複文や談話の中で主文の動詞が最上位の動詞として支配領域の時制を定めるという時制の一致の存在を説明している。アスペクトに関しては進行形 (Progressive) の be+ing および完了形 (Perfect) の have V+PP. II の2つの形式が説明されている。</p> <p>第4章では英語とモンゴル語におけるテンスおよびアスペクトの表現形式が扱われ</p>			

ている。第2章でも挙げたBybee (1985) のテンス・アスペクト表現の3つの主要な結合手段としての、Ⅰ. 語彙的表現、Ⅱ. 屈折的表現、Ⅲ. 統語的表現の区別に基づき、Ⅰ、Ⅱを形態論的手段、Ⅲを統語論的手段として区分する。前者の形態論的手段には、英語の1. ベース形式、2. -s 形式、3. 過去形式、4. -ing 分詞、5. -ed 分詞とモンゴル語のテンスを表す1. -san、2. -jee/-chee、3. -v、4. -laa、5. -dag、6. -aa、7. -na が、アスペクトを表す1. -chih、2. -zna-等、27の接尾辞が属する。後者の統語論的手段には、英語の助動詞 do、have、be、can、may、shall、will等の助動詞、have to、be about to等の半助動詞 (semi auxiliary) そしてモンゴル語の連結助動詞 bai-、bol-およびehel-、yav-、chad-等の準助動詞、ajee、atal、avaas 等の不完全助動詞が属する。

第5章では、工藤 (1995) におけるテキストタイプの2分類中の小説の“はなしあい”の文における英語の-ed接尾辞による単純過去形がモンゴル語のどのような表現形式に対応するかという問題が扱われている。その結果、英語の単純過去形はモンゴル語の接尾辞-jee/-chee、-v、-laaによる単純過去形のみでなく、単純非過去形、アスペクト形式、動名詞語尾、連用語尾、ムードおよびモダリティー形式、動詞を持たない文に対応することが明らかとなった。また、対応のずれの要因として、モンゴル語の歴史的現在用法、話者の視点に関わる相違、等が挙げられている。

第6章では、英語の単純現在形とモンゴル語の接尾辞-naによる単純非過去形の対応を、先行研究における英語の単純現在形の1. 状態的用法、2. 習慣的用法、3. 瞬間的用法、4. 過去に言及する用法、5. 未来に言及する用法、6. 虚構的用法、モンゴル語の非過去形の1. 無時間的用法、2. 習慣的用法、3. 未来に言及する用法、4. 歴史的現在用法、5. 現在に言及する用法、6. 進行的用法のそれぞれ6つの用法に関して調べている。両言語における用法の違いにも表れているように、モンゴル語では英語と異なり、発話時と同時に起こる出来事を表す瞬間的な用法では-naによる単純非過去形ではなく-laaによる単純過去形、現在進行形等が用いられ、また両言語には歴史的現在の用法があるにもかかわらず、モンゴル語の歴史的現在は不完全動詞 ge にしか用いられないため、歴史的現在の対応関係はほとんどないことが明らかとなった。

第7章では、英語とモンゴル語における語彙アスペクトと進行形の共起性が扱われている。本論文では一般的に進行形と共起が困難な状態述語を、状態場面タイプに従って4種類の述語に分類し、be、standのような所在の述語、belong to、ownのような所有述語に関して英語と比べてモンゴル語では進行形に関する述語の共起制限が少ないことを明らかにし、reachのような到達述語に関しては結果状態ではなく「まさに～しようとしている」という到達点への接近を表すという両言語の共通性を指摘している。

第8章では、英語の単純過去形とモンゴル語の対応関係、英語の単純現在形とモンゴル語の対応関係、英語とモンゴル語の進行形の対応関係が総括され、今後の課題として両言語におけるテンス、アスペクト形式の更なる対照研究の必要性が指摘されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、英語およびモンゴル語におけるテンス・アスペクトの表現形式を、英語の単純過去形、単純現在形、進行形という3つのカテゴリーとそのモンゴル語の対応に関して比較・対照した実証的研究である。

本論文の学問的貢献として、Bybee (1985) におけるテンス・アスペクト表現の3つの主要な結合手段としての、Ⅰ. 語彙的表現、Ⅱ. 屈折的表現、Ⅲ. 統語的表現という理論的な枠組みに基づいて、英語とモンゴル語のテンスおよびアスペクトの表現形式を厳密に分類し、両言語の対応関係を統計的に記述したことが挙げられる。

本論文は先行研究における過去／非過去という時制の2区分、状態 (State)、活動 (Activity)、達成 (Accomplishment)、到達 (Achievement) というアスペクトの4タイプの分類、証拠性 (evidentiality) の概念に基づく過去時制における発話時からの遠隔度合の区別を表す“即時対遠隔” (immediate vs. remote) など、テンス・アスペクト研究に関する基本的な概念を踏まえて、それらの概念を自己の研究に応用し、英語とモンゴル語のテンスおよびアスペクトの表現形式の違いを指摘し、語彙的表現および屈折的表現という形態論的手段に基づく英語の接尾辞-edによる単純過去形がモンゴル語の接尾辞-jee/-chee, -v, -laa による単純過去形のみでなく、単純非過去形、アスペクト形式、動名詞語尾、連用語尾、ムードおよびモダリティー形式、動詞を持たない文にも対応することを明らかにし、両言語の対応のずれの原因としてモンゴル語の歴史的現在用法、話者の視点に関わる相違などの要因を指摘していることもその大きな貢献である。

単純過去形と共に形態論的手段に基づく英語の単純現在形に関しても、その用法を1. 状態的用法、2. 習慣的用法、3. 瞬間的用法、4. 過去に言及する用法、5. 未来に言及する用法、6. 虚構的用法に分類し、同様にモンゴル語の-naによる単純非過去時制の用法を1. 無時間的用法、2. 習慣的用法、3. 未来に言及する用法、4. 歴史的現在用法、5. 現在に言及する用法、6. 進行的用法の6つの用法に分類し、相互に比較した結果、モンゴル語では英語と異なり、発話時と同時に起こる出来事を表す瞬間的な用法では-naによる単純非過去形ではなく-laaによる単純過去形、現在進行形等が用いられること、また両言語には歴史的現在の用法があるにもかかわらず、モンゴル語の歴史的現在は情報伝達動詞としての不完全動詞 *ge* にしか用いられないため、両言語における対応関係はほとんどないことを明らかにした点も評価に値する。

さらに、英語とモンゴル語における語彙アスペクトと進行形の共起性に関して、述語を語彙アスペクトとしての1. 状態述語、2. 活動述語、3. 達成述語、4.

一回的動作述語、5. 到達述語の5つのタイプに分けて両言語の進行形を詳細に分析している。その結果、一般的に進行形と共起が困難な状態述語に関して英語と比べてモンゴル語では進行形に関する述語の共起制限が少ないことを明らかにし、到達述語に関しては両言語とも結果状態ではなく到達点に至るまでの接近を表すという共通性を指摘していることも本論文の大きな貢献である。

本論文は対応例の精緻な統計的分析に基づく対照言語学の分野における実証的研究としての貢献において高く評価される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認められる。また、平成27年1月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 平成 年 月 日以降